

いふ。午後二時百何度かを示す宿の寒暖計に愛想を盡かして、北歐の涼しさを樂みに纔に元氣を附けて停車場に向つた。發車までの十數分間を待合室に費す所を、税關吏と妙齡の婦人とに襲はれた。

荷物でも檢べるのかと思つたのは、誤りで、實は此の婦人が話を聞きたいといふのでと、税關吏が取り次いだ。荷物検査の濟んだ旅客以外には、此の構内には何人も入れぬので、役人付き添ひの次第と分つた。女は某新聞の記者であつた。ブダ・ペストに就ての感想を聞きたいとの注文であつたので、こゝには夏來る可からずと廣告する必要あるを感じたといふたら、何しろ七十年目の暑さといふのですからと、綺麗な顔に「九世紀以來歐洲に入り込んだ匈牙利人の間には、其後の人種混合の爲だか何だか知らないが、兎に角美貌の多いのは事實である、英吉利あたりの往來で見るとは雲泥の相違である」氣の毒さうな色を浮べる。種々雑多な質問に辟易して立ち上ると、もうたつた一つ丈けと問ふ。

日本の婦人の一般状態は？ と飛んでもない方角違ひの質問である。自分はさういふ質問には一寸答へかねるが、それを知るのに最も好い方法を教へやうかといふと、どうも有難うと先づ禮を述べ、是非と迫つて新に手帳の頁を繰る。「それはあなた自身日本に行つて見て來るのだ」といふたら、例の肩をすぼめて手を舉げたから、それを拍子に失敬した。翌日の其の新聞を見て見たい氣持はいまだに時々起る。

(週刊朝日、大正十一年七月五日夏季特別號)